

東アジア世界史研究センター 2010年度活動報告

専修大学社会知性開発研究センター内の一組織として開設された、東アジア世界史研究センターにおいて申請していた研究プロジェクト「古代東アジア世界史と留学生」は、平成19年度に文部科学省によって「私立大学学術研究高度化推進事業」(オープン・リサーチ・センター整備事業)として選定された。本年度はこの事業の4年目であった。

本学は、中国の西北大学に収蔵されて間もない2004年に、日本の遣唐留学生であった「井真成」の墓誌を同大学と共同で発見・確認した。この墓誌の発見は日中両国の研究者に大きな衝撃を与え、2005年1月には両大学の共同プロジェクトとして国際学術シンポジウムなどを開催した。今日もこの墓誌は多くの研究を蓄積し、それらは本研究プロジェクトの目指す留学生の交流に絞った東アジア世界における構造研究の基盤となっている。

こうした東アジアの諸地域は、それぞれの国家がそれぞれの目的をもって交流し、様々な文化・文物の流入を期待した。それを直接担ったのが、留学生であった。昨年度のシンポジウムのなかでも明らかにされたように、この各地域の留学生を通して、東アジア世界史研究に新たな方向を打ち出すべく、当センターは本研究を継続することにしている。

今年度も、Ⅰ. 秦・漢時代から隋・唐時代の中国への東アジアからの交流・留学生の史資料上の全貌を明らかにすること、Ⅱ. 古代の東アジアの国々への影響を「媒介者」を通してその歴史的意義を問いつつ解明すること、Ⅲ. 東アジア世界史について内外の研究者と交流し、若手研究者を育成すること、Ⅳ. 研究成果を公開講座・シンポジウムを通して公開すること、を引き続き研究目標に据えた。この目標の達成のために本プロジェクト内に設置した、①遣唐使井真成墓誌関係史資料の研究、②日本・中国・朝鮮における留学生の史資料についての研究、③政事・制度・文化思想の接触と受容からみた東アジア世界の研究、④物の移動からみた東アジア世界の研究、という4つのテーマは今年度も鋭意継続されている。

このプロジェクトの運営のために初年度立ち上げた、「東アジア世界史研究センター委員会」は、今年度も各研究テーマについての計画を策定し、進行状況の検討を行なった。また研究代表者は、東アジア世界史研究センター代表として委員会での議論を主導し、各研究テーマの進捗状況と今後の計画について必要な調整を行なうとともに、東アジア世界史研究センターの上部機関である社会知性開発研究センターに報告し、承認を得る役割を円滑に果たしている。さらに、4つの研究テーマのリーダーを中心に組織された「東アジア世界史研究センター運営小委員会」、ならびに研究代表者の補佐としての事務局長および事務室は、各研究テーマと関連した事務的な業務を円滑に進行している。

各研究者も研究を進めるとともに、研究成果を発表するために開かれる公開講座・シンポジウム、および本センターを研究拠点とすべく設置された研究会の企画、さらには『年報』等の編集を分担し、その責任者として、東アジア世界史研究センター委員会において適宜進捗状況を報告している。

以上のような研究体制を土台にして東アジア世界史研究センターでは研究活動を行ない、今年

度も、公開講座・シンポジウムを開催（各1回）することにより、その研究成果を広く公開した。さらにこれらにあわせ、我が国の研究者の参加を広く募った研究会（全2回）を開催し、本研究センターをこのテーマに関する情報や人的交流のセンターとなるべく努めている。これらの内容は『年報』を発行することで研究者のみでなく、一般市民にも公開することにしている。本プロジェクト開始以来、収集している、留学生についての史資料・研究文献についても、インターネット上でデータベース「古代東アジア世界史年表」という形での公開を着実に進めている。本年度も、これらの研究の推進、および補助的役割を担う若手研究者の育成のためにR・A（研究補助員）を採用することとした。

具体的な研究活動は、上述した「Ⅰ. 秦・漢時代から隋・唐時代の中国への東アジアからの留学生の史資料上の全貌を明らかにすること」について、本年度も中国・日本・朝鮮・渤海の史資料から留学生の記事を収集する作業に努め、そのデータベース「古代東アジア世界史年表」として、交流年表とその史料をホームページ上に公開しているが、今年度は、昨年度の701年～745年から、618年～805年に年代を拡大することができた。「Ⅱ. 古代の東アジアの国々への影響を「媒介者」の歴史的意義を問いつつ解明すること」について、公開講座では、遣唐使の廃止前後、及びそれ以後における中国文化の「日本化」の過程や「モノ」の移動をあつかった。2日間にわたって開催されたシンポジウムでは、朝鮮半島の百済・新羅における中国との交流を考古学の見地から考察した。そこでは自国の文化と外来である中国文化とが、どのように影響しあったのか、またそのなかから百済・新羅の独自の文化がどのように形成されていったのかを明らかにした。シンポジウムの討論では、それらと日本の文化との関係が議論され、前年度までに、本プロジェクトが提言してきた、唐を中心として各国に放射線状に伸びる線上の往復運動ではなく、新羅と日本と渤海における、唐を中心とした同心円の円周上の交流・移動の分析という新たな可能性について、その具体的な手掛かり、及び資料を得たといえよう。「Ⅲ. 東アジア世界史について内外の研究者と交流し、若手研究者の育成をすること」について、研究会において韓国の大東文化財研究院の裴成熾氏、シンポジウムにおいて、同じく韓国の韓国国立金海博物館館長の宋義政氏に講演を依頼し、また当センターの研究員でもある中国の西北大学の王維坤教授には今年度客員教授として、本学に招聘して、後期の授業を担当していただいた。こうした機会を通じて、当センター研究員ならびに国内の研究者との交流を実現した。また若手研究者の育成については、R・Aとして3名を採用して研究の進展させる機会を提供した。今年度も上記の研究会の開催などを通して、情報や人的交流のセンターとしての本センターの役割の一端を果たすことができた。「Ⅳ. 研究成果を公開講座・シンポジウムを通して公開すること」については、今年度も多くの参加者を得て、公開講座・シンポジウムを開催して広く市民に研究成果を公開することができた。今年度は、上述したように東アジア世界における「モノ」の移動を公開講座・シンポジウムの中心テーマとした。本年度の『年報』5号の発行は、これらを広く公開する役割を担っている。

研究環境の整備に関連して、東アジア世界史研究センター室を中心に、昨年度にも増して研究を推進する条件を整備させた。さらに研究に不可欠である史料および文献の調査と収集・整理を進めるべく、5年間を通して、日本・中国の文献史料の収集・整理に努め、それに関連する図書・工具類の購入を進めることができた。

なお、本プロジェクトに関する情報発信の手段として、引き続き Web 上にホームページを公開している。研究活動の詳細については、この東アジア世界史研究センターのホームページをご覧ください (<http://www.senshu-u.ac.jp/~off1024/>)。

(1) 2010年度公開講座・シンポジウム

2010年7月10日(土) 専修大学生田校舎 参加者200名

第4回公開講座「遣唐使外交の終焉と東アジア・日本」

司会・進行 飯尾 秀幸(東アジア世界史研究センター研究員/専修大学教授)
矢野 建一(東アジア世界史研究センター研究員/専修大学教授)

講演

13:00~13:20 荒木 敏夫(東アジア世界史研究センター代表/専修大学教授)
「趣旨説明」

13:20~14:20 皆川 雅樹(専修大学附属高等学校教諭)
「モノから見た遣唐使以後の東アジアの交流」

14:30~15:30 佐藤 宗諄(奈良女子大学名誉教授)
「大陸文化の「日本化」と国際交流～白詩と道真～」

15:50~17:00 討論

2010年11月20日(土)・21日(日) 専修大学神田校舎 参加者のべ266名

第4回シンポジウム「モノの移動と古代東アジア世界—朝鮮半島と日本列島を中心に—」

司会・進行 土生田 純之(東アジア世界史研究センター研究員/専修大学教授)
高久 健二(東アジア世界史研究センター研究員/専修大学教授)

講演

11月20日(土)

14:00~14:10 土生田 純之(東アジア世界史研究センター研究員/専修大学教授)
「趣旨説明」

14:10~15:10 山本 孝文(日本大学准教授)
「出土遺物にみる百済の対外交流」

15:20~16:20 宋 義政(韓国国立金海博物館館長)
「新羅の外来系文物」
通訳:高久 健二(東アジア世界史研究センター研究員/専修大学教授)

11月21日(日)

11:00~12:00 中野 高行(東京農業大学第三高等学校教諭)
「推古朝と帝国性」

13:00~14:00 亀田 修一(岡山理科大学教授)

「考古学からみた日本列島と朝鮮半島の交流—4～7世紀の西日本地域を中心に—」

14:20～16:00 討論

(2) 2010年度研究会

2010年9月25日(土) 専修大学神田校舎 参加者11名

第4回研究会

司会・進行 荒木 敏夫(東アジア世界史研究センター代表/専修大学教授)
飯尾 秀幸(東アジア世界史研究センター研究員/専修大学教授)

講演

14:00～17:00 中村 裕一(武庫川女子大学教授)
「贈尚衣奉御井真成を巡る二・三の問題—唐代の外国使節の授官と関連して—」

2010年10月30日(土) 専修大学神田校舎 参加者32名

第5回研究会

司会・進行 土生田 純之(東アジア世界史研究センター研究員/専修大学教授)

講演

13:00～15:30 裏 成嶺(大東文化財研究院調査研究室長)
「高霊・池山洞第73～75号墳の発掘調査」
通訳:高久 健二(東アジア世界史研究センター研究員/専修大学教授)

(3) 調査報告

国内調査記録

氏名 リサーチ・アシスタント 伊集院 葉子、窪田 藍

用務地 京都市、大津市

用務先 安祥寺、後山階陵、大津市立歴史博物館、錦織遺跡、崇福寺・梵釈寺跡、京都大学総合博物館 他

出張日程 平成23年1月25日(火)～平成23年1月27日(木)

出張報告

京都市では、9世紀日唐交流の一翼を担った僧の一人である恵運と、後援者とみられる藤原順子の事績を追って安祥寺と後山階陵を訪問した。大津市では、百濟滅亡後に遷都された宮都で、7世紀最後の遣唐使派遣時の宮であった近江大津宮錦織遺跡を実見したことによって、その地理的環境と規模を実感することができた。また大津市歴史博物館では、同市の穴太遺跡から出土した、朝鮮系渡来人の住居の特徴であるオンドル遺構を見学し、当地に古くから渡来人が居住していたことを確認した。近年の上高砂遺跡の発掘によってほぼ確定された梵釈寺跡を調査できたのも、大きな成果であった。

(4) 2010年度活動記録

2010年

- 4月1日 R・A 辞令交付
事務、ならびに R・A 研究との研究補助体制引継ぎ
- 4月20日 第1回運営小委員会
内容 今年度の研究計画の確認
公開講座の実施要項の確認
シンポジウムの論点整理と研究会の企画案
- 4月27日 第1回センター会議
議題1 平成22年度センター組織体制について
2 平成22年度予算額および取扱いについて
3 平成22年度活動計画
4 研究の進捗状況
- 7月1日 第2回運営小委員会
内容 シンポジウム・研究会の報告者調整
- 7月6日 第2回センター会議
議題1 第4回公開講座について
2 シンポジウムの進捗状況
3 年報の刊行について
- 7月10日 第4回公開講座 生田校舎10号館10203教室
- 7月10日 第3回運営小委員会
内容 第4回研究会の準備
- 9月25日 第4回研究会 神田校舎1号館7A会議室
- 10月5日 第4回運営小委員会
内容 第5回研究会の準備
シンポジウムの進捗状況
- 10月12日 第3回センター会議
議題1 第5回研究会について
2 第4回シンポジウムについて
3 次回の研究会の開催について
4 年報の刊行について
5 来年度予算・行事予定について
- 10月30日 第5回研究会 神田校舎1号館102教室
- 11月9日 第5回運営小委員会
内容 第5回研究会の準備
- 11月16日 第4回センター会議

議題1 第4回シンポジウムについて

11月20日・21日 第4回シンポジウム 神田校舎1号館301教室

2011年

1月11日 第6回運営小委員会

内容 来年度の研究計画の確認

1月25日 国内出張（1月27日まで）

R・A 伊集院 葉子

R・A 窪田 藍

出張先 京都市、大津市

2月3日 第5回センター会議

議題1 来年度の研究計画について

2 来年度のセンター組織体制について

3 年報第5号の刊行について

4 春休み中の出張について

2月23日 海外出張（2月26日まで）

センター研究員 矢野 建一

センター研究員 土屋 昌明

出張先 中国（西安）